

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 基礎篇第七課 さあ、かぞえましょう：助数詞

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00002786">https://doi.org/10.15084/00002786</a>

日本語教育映画解説 7

基礎篇  
第七課

さあ、かぞえましょう

—助数詞—

国立国語研究所

## 前 書 き

国立国語研究所では、昭和49年度以来、日本語教育ついで日本語教育センターにおいて、日本語教育教材開発事業の一環として日本語教育映画基礎篇を作成してきた。これは従来、文化庁において進められていた映画教材作成の事業を新たな形で引き継いだものである。

日本語教育映画基礎篇は、各課5分の映画にそれぞれ完結した主題と内容を持たせ、それを教育の必要に応じて使用する補助教材、また、系列的に初級段階の学習事項を順次指導する教材として提供しようとするものである。

映画の作成にあたっては、原案の作成・検討から概要書の執筆まで、また、実際の制作指導においても、日本語教育映画等企画協議会委員の方々に御協力頂いた。ここに厚く御礼申し上げる。

この解説書は、映画教材の作成意図を明らかにし、これを使用して学習し、指導する上での留意点について述べたものである。この解説書がこの映画教材の利用を一層効果あるものにするを願っている。この第七課「さあ、かぞえましょう」の解説は、日本語教育センター日本語教育教材開発室武田祈の執筆によるものである。なお、資料1及び資料2については、同室の日向茂男があたった。

昭和54年3月

国立国語研究所長

林 大

## 目 次

1. はじめに	1
2. この映画の目的・内容・構成	2
2.1. 目的・内容	2
2.2. 構成及び場面	3
3. この映画の効果的な利用のために	9
3.1. この映画を活用する場合の留意点 1	9
3.2. この映画を活用する場合の留意点 2	10
3.3. 「数詞」と「助数詞」	10
3.4. 参考例	15
3.5. 助数詞一覧	16
4. 参考文献	21
資料1. 使用語彙一覧	25
資料2. シナリオ全文	31

## 1. はじめに

この日本語教育映画基礎篇は、初歩日本語学習期における視聴覚補助教材として企画・制作されたもので、この映画「さあ、かぞえましょう」は、その第七課にあたるものである。

この映画の企画、概要書（シナリオ執筆のための最終原案）の執筆等にたったものは、次のとおりである。

### 昭和50年度日本語教育映画等企画協議会委員（肩書きは当時のもの）

池尾 スミ	アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター専任講師
石田 敏子	国際基督教大学専任助手
今田 滋子	国際基督教大学助教授
川瀬 生郎	東京外国大学附属日本語学校教授
木村 宗男	早稲田大学語学教育研究所教授
窪田 富男	東京外国語大学教授
斎藤 修一	慶応義塾大学国際センター助教授
佐久間勝彦	アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター専任講師

### 日本語教育部（当時）関係者（肩書きは当時のもの）

林 大	日本語教育部長・事務取扱
武田 祈	日本語教育部日本語教育研修室長
日向 茂男	日本語教育研修室研究員
水谷 修	日本語教育研究室長

この映画「さあ、かぞえましょう」は、石田敏子委員の原案に協議委員会で検討を加え、概要書にまとめあげてから制作したものである。制作は日本シネセル株式会社が担当した。概要書のシナリオ化、つまり脚本の執筆には同会社の前田直明氏があたり、同氏はまたこの映画の演出を担当した。言語

演出の面では、協議会委員及び日本語教育部（当時）関係者の意見が加えられている。

本解説書は、日本語教育センター日本語教育教材開発室の武田 祈が執筆し、資料1.及び資料2.については同室の日向茂男が担当した。執筆にあたっては、企画・制作における意図が十分生きるよう努めた。

現在、この映画は、より多くの人の利用の便をはがって下記九か所において貸し出しを行っている。

- ・ 北海道教育庁指導部社会教育課視聴覚教育係
- ・ 宮城県教育庁社会教育課
- ・ 都立日比谷図書館視聴覚係
- ・ 愛知県教育センター企画管理課
- ・ 京都府教育庁社会教育課
- ・ 大阪府教育庁社会教育課
- ・ 兵庫県教育庁社会教育・文化財課
- ・ 広島県教育庁社会教育課
- ・ 福岡県視聴覚ライブラリー

なお、この映画はそのビデオ版とともに上記制作会社が販売している。

## 2. この映画の目的・内容・構成

### 2.1. 目的・内容

この映画「さあ、かぞえましょう」は、初歩日本語教育において、日本語の数をかぞえる場合、数詞と助数詞の存在すること、さらに数詞に助数詞がついたとき、基数の発音や助数詞の発音に変化のあることを簡潔に提示することにより、助数詞に対する学習の契機及び導入の目的をもって作成されたものである。

この映画でとりあげた助数詞は、「枚」「匹」「本」「杯」「ひとり」「ふた

り」と基数のかぞえ方である。

ここでは、それぞれの助数詞を具体的に理解し、それに続いて具体的な事物を提示しながら数える形式によって全体が構成されている。

映画としては、手品師がものを取り出していくものを中心として展開する。また、ハンカチと風船について、学習者が映画を見ながら、1から10までかぞえられるようにくふうがされている。

とりあげた助数詞が、「枚」「匹」「本」「杯」及び最初の「～秒前」と、数詞が1～5までの間に限られているのは、単に映画が5分ものであるということだけでなく、多く提出することによって学習者が数詞と助数詞の結合からくる変化について混乱することを避け、助数詞に対する関心が次の段階への学習への契機となり、発展することを期待して可能な限り、簡潔に具象的な視覚像と聴覚の両面からともにはあくできるようにして作成されている。

## 2.2. 構成及び場面

この映画は①のメインタイトルの映写に続き、②のストップウォッチの映写とともに秒読みの形で始まる（○でかこんだ数字は、映画の中で提出された語の順序を示している）。

① 5秒前

② 4秒前

③ 3秒前

④ 2秒前

⑤ 1秒前

⑥ ハイ、スタート。

③の場面では、手品師が紙片を取り出し、スーパーの“さあ、かぞえましょう”によって紙片をかぞえる。

⑦ いちまい

⑧ にまい

⑨ さんまい

⑩よんまい

紙をにぎると粘土になり、さらにそれを机の上に置き手で押すと平らな粘土となり、それをなでると1枚のカードになる。

⑪いちまい

平たいものの実写があり、レコード2、さら3、ワイシャツ4、切手5について次のよみが示される。

⑬にまい

⑭さんまい

⑮よんまい

⑯ごまい

⑰さあ、かぞえましょう。  
のことばに伴って、手品師はいろいろな色のハンカチを次々に取り出す。

〔注〕平たいもので〔枚〕でかぞえるものには、次のようなものがある。  
「ふとん、毛布、ふろしき」など、また布類だけでなく「せんべい」など堅いものにも用いられる。

⑱の場面では、手品師が、今度は、動物を取り出し、スーパーの“ひき、びき、びき”に伴い、動物をかぞえる場合の

⑲ひき

⑳びき

㉑びき

次にハムスターが出てくる。

㉒いっびき、

㉓にひき、

㉔さんびき  
次に、あなぐま1、いぬ2、さる3、かめ4、かに5の実写があり、

㉕いっびき

㉖にひき

㉗さんびき



⑳よんひき

㉑ごひき

のよみが示される。

〔注〕 虫なども「匹」でかぞえられる。動物のかぞえ方には、また、「頭」が使われる。「頭」のほうは、「匹」に比べて比較的大きな形をしているもの、象、牛、馬等をかぞえる場合に使われている。

㉒の場面では、棒状のものが映写され、スーパーの“ほん、ほん、ほん”の提示により、

㉓ほん

㉔ほん

㉕ほん

のよみが示される。

さらにびんが取り出され、

㉖いっぽん

㉗にほん

㉘さんほん

とかぞえられる。

次の実写では、かさ1、木2、バンド3、鉛筆4、ネクタイ5が写し出され、

㉙いっぽん

㉚にほん

㉛さんほん

㉜よんほん

㉝ごほん

㉞ひとつ

がかぞえられ、次々に粘土の数がふえるにつれて、

㉟ふたつ

㊱みつつ

④③よつつ ひとつの茶碗にひとつの茶碗をのせてお茶を飲む。

④④いつつ ひとつの茶碗にひとつの茶碗をのせてお茶を飲む。

④⑤むつつ ひとつの茶碗にひとつの茶碗をのせてお茶を飲む。

④⑥ななつつ ひとつの茶碗にひとつの茶碗をのせてお茶を飲む。

④⑦やつつ ひとつの茶碗にひとつの茶碗をのせてお茶を飲む。

④⑧このつつ ひとつの茶碗にひとつの茶碗をのせてお茶を飲む。

④⑨とお ひとつの茶碗にひとつの茶碗をのせてお茶を飲む。

がかぞえられる。

それにハンカチをかけるとふうせんが出てきて、

⑤⑩さあ、かぞえましょう。

のことばにより、ふうせんを学習者がかぞえるように促す。

引き続いて実写となり、ボール1、卵2、カップ3、みかん4、あめ5に  
ついて、

⑤⑪ひとつ ひとつのボールを数える。

⑤⑫ふたつ ふたつの卵を数える。

⑤⑬みつつ みつたみかんを数える。

⑤⑭よつつ よつたあめを数える。

⑤⑮いつつ ひとつのボールを数える。

がよみ上げられる。

⑦の場面では、ティーカップのかぞえ方にも二とおりのあることを示す  
が、

空のティーカップ3では、

「ひとつ、ふたつ……」のかぞえ方しか示されていない。しかし、映画を見  
せる場合、指導する側では、もう一つの漢語系統のかぞえ方「イチ、ニ、サ  
ン……」もこの映画には使われていることをあらかじめ承知しておく必要が  
ある。数詞の説明は、この解説書の数詞のところで説明が行われているが、  
和語系統のものをⅠ類とし、漢語系統のものをⅡ類として示してある。

また、この実写に示されたものを、ここでは、「ひとつ、ふたつ、……」

とかぞえているが、「1個」「2個」ともかぞえられる。現代語の傾向としては簡略化して使われることも多いが、逆に「ひとつ、ふたつ、……」と普通にはかぞえられるものにも、子供などは、「1個、2個」といったかぞえ方をするものもある。

⑦の場合では、ティーカップのかぞえ方に使われる状況により、二とおりの使い方がることが示される。

空のティーカップ3では、

⑤ みつつ

となり、これに紅茶をそそいで入れた場合、その容器となるティーカップは、

⑥ いっぱい

⑧ にはい

⑨ さんばい

という言い方になることが示される。

〔注〕 ただし、ティーカップを、ここでは、「みつつ」という言い方で示されているが、⑩の〔注〕でも述べたように、「さんこ〔3個〕」という言い方も可能である。

また、液体などがなかにはいっている場合のよみが示される。

〔注〕 ほかに「本」でかぞえられるものには、電信柱、煙突、ビールびん、牛乳びん等もあげることができる。一般的には細くて長いものをかぞえる場合に用いられる。ただし、燈台などは「基」のほうが使われる。

④の場面では、数詞の概念を明確にはあくさせるために数詞が提示される。

粘土をまるめ、机の上に置くと、スーパーは“ひとつ”を示し、

⑩ ひとつ

がかぞえられ、次々に粘土の数がふえるにつれて、

⑪ ふたつ

⑫ みつつ

- ④3 よつつ
- ④4 いつつ
- ④5 むつつ
- ④6 ななつ
- ④7 やつつ
- ④8 ここのつ
- ④9 とお

がかぞえられる。

それにハンカチをかけるとふうせんが出てきて、  
⑤0 さあ、かぞえましょう。

のことばにより、ふうせんをかぞえるように促す。

〔注〕 映画を見ているものに声を出して言わせるのも一つの方法である。

引き続き実写となり、ボール1、卵2、カップ3、みかん4、あめ5に  
ついて、

- ⑥1 ひとつ
- ⑥2 ふたつ
- ⑥3 みつつ
- ⑥4 よつつ
- ⑥5 ひとつ

がよみ上げられる。

〔注〕 この図では、和語系統の表現である、たとえば、ビールをついだ「グ  
ラス」、酒のはいつている「さかづき」等の場合も、ティーカップと同様に  
「はい」とかぞえられる。ただし、なかに液体等がはいっていても、ビール  
びん、牛乳びんなどは、「本」の方が使われるのですべてが同様ではないこ  
とに注意しておく必要がある。

⑧の最後の場面では、手品師が、細長い布袋の中から子供を取り出し、人  
のかぞえ方がされる。スーパーの“ひとり”につれて、

- ⑥8 ひとり

続いて、次々に出てくる子供につれて、

④ふたり

⑤さんにな

⑥よにな

⑦ごにな

となる。

〔注〕「ひとり、ふたり」は、単純に数詞とだけ考えられがちであるが、これはⅠ類の「ひとつ、ふたつ」の語基「ひと、ふた」に接尾語の「り」がついたものであるが、見られるようにその独立性は非常に弱いのが特徴である。和語では、たとえば「八車（やぐるま）、九重（このこのえ）」のように名詞的に使われるものが非常に多い。

この映画は、手品師が、子供の出てきた袋に入ると、消えてしまうところで終わりとなる。

映像の視覚的な要素と、音声の聴覚的な要素との組み合わせにより、全体として楽しみながら学習されるようにくふうされた補助教材として役だつ映画であるということができよう。

### 3. この映画の効果的な利用のために

#### 3.1. この映画を活用する場合の留意点1

この映画の目的・内容・構成については、前に述べられているが、この映画は、「助数詞」への導入を主な目的として作られており、提出されているものは、「まい（枚）」「ひき（匹）」「ほん（本）」「はい（杯）」及び最初に出てくる「～秒前」と、1～10までの一とおりの数え方と、「ひとり」「ふたり」等の人の数え方に過ぎない。

さらに、これ以外の助数詞の提示、もしくは学習の展開をはかるためには、ほかの映画が用意されるか、教師の資料の作成が必要になってくる。

しかし、この映画の限界点・問題点は別として、この映画のもつ利点を効

果的にまた最大限に活用すべきであると思う。

いうまでもなく、映画の利点の一つは、映像を通して具象的なものの形がリアルにとらえうることで、それと同時に、その数え方が耳を通して同時に聞くことができるという点にある。

この利点をより効果的に生かすためには、ただ単に1回だけ見せて終わりとせず、2回もしくは、3回と反復して見せることにより、学習者が自然に口に出して数をかぞえられるように慣れさせておこなうなら、「助数詞」の学習を次の段階へ発展させる場合に非常に効果的な役割を果たすことができる。

16ミリの映画では、くり返し見せることになるが、V・T・Rの場合には、停止させて、さらに細かく確認しつつ授業を進めるなどの、より効果的な学習の利用方法をあらかじめ考えておく必要がある。

### 3.2. この映画を活用する場合の留意点 2

この映画「さあ かぞえましょう」のサブタイトルは——助数詞——となっているが、映画で提示されている内容を厳密に区分すれば、数詞と助数詞とがある。

日本語の数の呼称は、外国語と比べていくとおりにも発音され、外国人の学習者にとっては、複雑なものと思われるもののひとつであろう。

この点から考えて、教師は、まず、「数詞」の呼称の種類とその使い方、また、数詞に助数詞がつく場合に数詞及び助数詞の発音に変化のあることなどを、あらかじめ整理しておいて学習者に無理なく理解させうように準備しておくことが必要である。

### 3.3. 「数詞」と「助数詞」

数によって数量や順序を表す語、すなわち数詞には、基本となる二つの種類がある。

そのひとつは、  
I類 ひとつ〔1〕、ふたつ〔2〕、みっつ〔3〕、よっつ〔4〕、いっつ〔5〕、

むつつ〔6〕, ななつ〔7〕, やつつ〔8〕, ここのつ〔9〕, とお〔10〕  
もうひとつは,

Ⅱ類 いち〔1〕, に〔2〕, さん〔3〕, し〔4〕, ご〔5〕, ろく〔6〕, しち  
〔7〕, はち〔8〕, く〔9〕, じっ・じゅう〔10〕

である。

Ⅰ類の呼称は、和語系統のものであり、Ⅱ類の呼称は、漢語系統のものである。

日常使用する場合には、この両者が混用されることが多いので、外国人の学習者が、日本語の数の数え方を学習する際にとまどうことが多く、これが日本語をむずかしく考えてしまうものの一つでもあるので、指導上特に注意を要する。

しかし、この両者は、すべてが無秩序に使われるものではなく、使われる箇所はだいたい法則的に用いられているので、その点をじゅうぶんに理解させればよい。

Ⅰ類の特徴としては、さらに簡略化して「ひ、ふ、み、よ、いつ、む、なな、や、この」などと使われることもある。Ⅰ類のうち「よ」はまた「よん」と発音される場合が多い。

この映画のなかでも、

「⑩⑮よんまい」, 「⑳よんひき」, 「㉓よんほん」, 「㉔4秒前」

となってあらわれる。

次に、この映画で提示されている数詞を、Ⅰ類とⅡ類に分類して示すと次のようになる。(以下、○で囲んだ数字は、映画のなかで提出された順序を示す番号である。)

いつつ 〔五つ〕 ④⑤

ここのつ 〔九つ〕 ⑧

とお 〔十〕 ⑨

ななつ 〔七つ〕 ⑥

ひとつ 〔一つ〕 ④⑥

ひとり 〔一人〕 63  
ふたつ 〔二つ〕 41 62  
ふたり 〔二人〕 64  
みっつ 〔三つ〕 42 63 66  
むっつ 〔六つ〕 45  
やっつ 〔八つ〕 47  
よっつ 〔四つ〕 43 64  
よにん 〔4人〕 60  
よんひき 〔4匹〕 27  
よんびょうまえ 〔4秒前〕 ②  
よんほん 〔4本〕 38  
よんまい 〔4枚〕 10 15

Ⅱ類（Ⅱ類の基数がこの映画のなかには、1～10まで提示されていないので（ ）に入れて提出した）。

（いち 〔1〕）

いちびょうまえ 〔1秒前〕 ⑤  
いちまい 〔1枚〕 7 12  
いっぱい 〔1杯〕 60  
いっぴき 〔一匹〕 21 24  
いっほん 〔1本〕 32 35

（く 〔9〕）

（ご 〔5〕）

ごにん 〔5人〕 67  
ごひき 〔5匹〕 28  
ごびょうまえ 〔5秒前〕 ①  
ごほん 〔5本〕 39  
ごまい 〔5枚〕 16



(さん〔3〕)

さんになん〔3人〕<sup>65</sup>

さんばい〔3杯〕<sup>62</sup>

さんびき〔3匹〕<sup>23,26</sup>

さんびょうまえ〔3秒前〕<sup>3</sup>

さんぼん〔3本〕<sup>34,37</sup>

さんまい〔3枚〕<sup>9,14</sup>

(し〔4〕)

(しち〔7〕)

(じゅう〔10〕)

(に〔2〕)

にはい〔2杯〕<sup>61</sup>

にひき〔2匹〕<sup>22,25</sup>

にびょうまえ〔2秒前〕<sup>4</sup>

にほん〔2本〕<sup>33,36</sup>

にまい〔2枚〕<sup>8,13</sup>

(はち〔8〕)

(ろく〔6〕)

ここに提示された語で見る限り、I類よりII類のほうが多く用いられている。そのなかで「4」がI類による言い方をされる場合が多いのは、「4」の音が「し〔死〕」の音に通じ、日本人の縁起の悪い音やことばを用いない習慣から「よ」のほうが使われることが多いのであると考えられる。もう一つは数字をかぞえる場合に、「4」の音「し」と「7」の音「しち」は聞き違いやすいということも理由として考えられる。

人をかぞえる場合、最初の「ひとり」「ふたり」だけがI類によって表されるのも、人をかぞえる場合の際立った表現のしかたである。これは⑧のところの〔注〕でも説明したとおり、「ひと・ふた」に接尾語の「り」がつい

たものだが、あとは「さんにん、よにん、ごにん……」となるのに、この二つだけにⅠ類が必ず使われるのは、もとはすべてⅠ類で言われてきたものが、漢語系統に置きかえられてきたのに、「いちにん」「ににん」の発音より「ひとり」「ふたり」の発音の方がしやすいので依然として根強く使われているのであると考えてよいであろう。20までの間には、このほか、「はたち(二十)、はつか(二十日)」に同様の現象がみられる。

現代語の言い表し方としては、Ⅱ類の方が全体としては優勢である。したがって、基調としては、主としてⅡ類が用いられ、そのなかにⅠ類のものが混用される形になっているのが実状である。

なお、文中では、動詞を修飾する形として、「木が1本あります」「犬が3匹います」という言い方でよく使われる。外国人学習者はよく「1本があります」「ひとりがいます」などと使うことがあるので注意しておく必要がある。

助数詞は数詞と結びついて使われるものであるから、助数詞を扱う場合には、上記のような数詞の特徴をよくはあくしておくことがたいせつであると思われる。

日本語では上に述べた数詞のあとについて、その数えられる事物の性質や形状を表すために用いられる接尾語の一種として、助数詞が用いられる。

この助数詞で特徴的なことは、数えるものの形や性質によって、それぞれちがったことばが使われることにある。

特にこの映画のなかで強調されているのは、このものの形や性質によって、それぞれに適応した助数詞が用いられなくてはいけないことと、もうひとつの面で、数詞すなわち基数に助数詞がついたとき、基数の発音が変わったり、また、助数詞の発音に変化があるということである。

この映画では、

「ひき〔匹〕」の音が、「ひき」<sup>22</sup><sup>25</sup><sup>27</sup><sup>28</sup>、「びき」<sup>21</sup><sup>24</sup>、「びき」<sup>23</sup><sup>26</sup>の三とおりに変化すること、

「ほん〔本〕」が、「ほん」<sup>33</sup><sup>36</sup><sup>38</sup><sup>39</sup>、「ほん」<sup>32</sup><sup>35</sup>、「ほん」<sup>34</sup><sup>37</sup>と三とおりに、

「はい〔杯〕」が、「はい」⑥①、「ばい」⑥②、「ばい」⑥③にの三とおりになることが示されている。

人をかぞえる「～人」の場合、特に初めの「ひとり」「ふたり」という言い方がされ、以後「さんにん」「よにん」「ごにん」のようになることを、ここでも指摘しておくことにする。

数詞が助詞を伴って発音される場合に促音化するものがある。

この映画では、それが、「いっぴぎ」②④②④、「いっほん」③②③⑤、「いっぱい」⑥③に表されている。

映画では、5のところまでしかあげていないので用例としては少なすぎるので、やはり見せる側では、1～10までのものについて説明ができるようにしておいてほしい。

### 3.4. 参考例

参考例として、この映画だけでは、不足している部分を補う意味で、ここにもう一度、1～10までの数詞と、数詞と助数詞とが結びついて使われるときに、数詞の音が変わる部分と、同じ場合に、助数詞の音が変わる部分について、ここでは、1～10までの場合に起こるものに限って掲げておくことにする。

#### I類

ヒトツ フタツ ミツツ ヨツツ イツツ ムツツ ナナツ ヤツツ  
ココノツ トオ

#### II類

イチ ニ サン シ ゴ ロク シチ ハチ ク ジュウ

○ 数詞で音が変わるか、ちがった発音がされるもの、又は二とおりの用い方が可能であると考えられるもの。

まい〔枚〕  $\left\{ \begin{array}{l} \text{ヨソ} \\ \text{シ} \end{array} \right\} \left\{ \begin{array}{l} \text{ナナ} \\ \text{シチ} \end{array} \right\} \left\{ \begin{array}{l} \text{キユウ} \\ \text{ク} \end{array} \right\}$

ひき〔匹〕	イッ	{ ヨン シ	ロツ	{ ナナ シチ	ハッ	キュウ	ジツ
ほん〔本〕	イッ	{ ヨン シ	ロツ	{ ナナ シチ	ハッ	キュウ	ジツ
はい〔杯〕	イッ	{ ヨン シ	ロツ	{ ナナ シチ	ハッ	キュウ	ジツ

。 助数詞の音が変化するもの

ひき〔匹〕 1, 6, 8, 10は ピキに, 3はビキ になる。

ほん〔本〕 1, 6, 8, 10は ボンに, 3はボン になる。

はい〔杯〕 1, 6, 8, 10は パイに, 3はバイ になる。

なお、文化庁編「外国人のための基本語用例辞典」の「付録」のなかに「4 数えることば」がある。これには、日本語教科書などに表れる数詞や助数詞のおもなものがあげられており、基本の数の部分や助数詞の発音のちがいがなどが、整理されて提出されているので参考にするには便利なので、活用されることを勧めておきたい。

### 3.5. 助数詞一覧

～インチ

～いろ (色)

～えん (円)

～かい (回)

～かい (階)「ガイ (3階)」

～かく (角)

～かく (画)

～かげつ (か月)

～がつ (月)

～がっき (学期)

～かん (巻) 「ガン (3巻)」  
 ～か (日) →にち  
 ～き (基) 燈台など  
 ～き (期)  
 ～きゃく (脚) いすなど  
 ～きゅう (級)  
 ～ぎょう (行)  
 ～きょく (局) 碁・将棋など  
 ～きょく (曲) 音楽, びょうぶを数えるとき,  
 ～キロ  
 ～キログラム  
 ～キロメートル  
 ～く (句) 俳句  
 ～グラム  
 ～けた  
 ～けん (件)  
 ～けん (軒) 「ゲン (3軒)」  
 ～こ (個)  
 ～こ (戸)  
 ～ご (語)  
 ～ごう (校) 学校, 校正など  
 ～こうねん (光年)  
 ～ごうしゃ (号車)  
 ～さい (歳)  
 ～さつ (冊)  
 ～シーシー (CC)  
 ～じ (時)  
 ～じ (字)

～じかん (時間)

～しつ (室)

～しゅ (種)

～しゅ (首) 短歌

～しゅう (週)

～しゅう (周)

～じゅう (重)

～しゅうかん (週間)

～じゅう (重)

～じょう (畳)

～じょう (条)

～しょく (色)

～せいき (世紀)

～せき (隻) 船などを数えるときに使う。

～せき (席)

～せん (銭)

～そう (艘) おもに小さな舟を数えるときに使う。

～そう (双) 二つで組になっているもの、手袋、びょうぶなど

～そく (足) 両足にはく一対のものを数えるとき、くつ下、「ゾク (3足)」。

～たい (体) 仏像・彫像など

～だい (台)

～だい (代)

～ちゃく (着) 競走などで使う。

～ちょうめ (丁目)

～つい (対) 二つで一組となるもの

～つき (月)

～つぼ (坪)

～てん (点)

～ドル

～トン

～ど (度)

～とう (頭)

～とおり (通)

～にち (日)

～にん (人)

～にんまえ (人前)

～ねん (年)

～ねんせい (年生)

～は (波)

一波, 二波など。「パ (一, 三, 四, 六, 八, 十波)」  
「4は (よんば)」となる。

～パーセント

～はい (杯)

「パイ (1, 6, 8, 10杯)」, 「バイ (3杯)」

～ばい (倍)

～はく (泊)

「パク (1, 3, 6, 8, 10泊)」

～はく (拍)

「パク (1, 3, 6, 8, 10拍)」

～はこ (箱)

「パコ (6, 8, 10箱)」

～はつ (発)

「パツ (1, 3, 6, 8, 10発)」

～はん (班)

「パン (1, 3, 6, 8, 10班)」

～ばん (晩)

～ばん (番)

～ばんせん (番線)

～ばんち (番地)

～ばんめ (番目)

～ひき (匹)

「ピキ (1, 6, 8, 10匹)」, 「ビキ (3匹)」

～ひょう (票)

「ピョウ (1, 6, 8, 10票)」, 「ビョウ (3票)」

～びよう (秒)  
 ～ぶ (部)  
 ～ぶん (分) 「ブン (1, 3, 6, 8, 10分)」  
 ～ページ  
 ～へん (遍) 「へん (1, 6, 8, 10遍)」, 「べん (3遍)」  
 ～ボルト  
 ～ポンド  
 ～ほ (歩) 「ポ (1, 3, 6, 8, 10歩)」  
 ～ほん (本) 「ポン (1, 6, 8, 10本)」, 「ボン (3本)」  
 ～マイル  
 ～ま (間)  
 ～まい (枚)  
 ～まん (万)  
 ～ミリ  
 ～メートル  
 ～め 一つめ, 二つめなど  
 ～もん (間)  
 ～リットル  
 ～り (里)  
 ～れつ (列)  
 ～わ (羽) 「パ (6, 8, 10羽)」, 「バ (3羽)」  
 ～わり (割)



#### 4. 参考文献

- 池上禎造 1940 「助数詞攷」『国語国文』10の3
- 市川三喜 「数詞について」『藤岡博士功績記念言語学集』
- 奥津敬一郎 1969 「数量的表現の文法」『日本語教育』
- 川端善明 1967 「数・量の副詞——時空副詞との関連」『国語国文』
- 見坊豪紀 1965 「現代の助数詞」『言語生活』
- 杉山栄一 1943 『国語法品詞論』 三省堂
- 白鳥庫吉 『日本語の系統』
- 宮地敦子 1972 「数詞の諸問題」『名詞・代名詞』（品詞別日本文法講座  
2）明治書院
- 森重 敏 1958 「数詞とその語尾としての助数詞」『国語国文』
- 山田孝雄 1936 『日本文法学概論』 宝文館
- レヴィ・ブリュール（山田吉彦訳） 『未開社会の思惟』
- 渡辺 実 1951 「日華両国語の数詞の機能——助数詞と単位名——」『国  
文国文』21の1

# 資 料

## 資料1. 使用語彙一覧

これは映画中に使用された全ての語と使用文例を一覧表にしたものである。資料 2. のシナリオ全文のせりふ同様、教材として活用できることも考慮してかな（ひらがな、かたかな）書きにしてある。

1. 見出し語はアイウエオ順に配列し、そこにその使用例を全て書き出した。
2. 見出し語の認定については、初級日本語教育の立場に立っている。
  - 2-1. 数詞、助数詞部分をそれぞれ見出し語にしている。ただし「ひとつ」「ふたつ」……「とお」、及び「ひとり」「ふたり」はそのまま見出し語にしている。
  - 2-2. 数詞部分の読み方が、たとえば「いち」「いっ」のように異なる場合は、横に並べて同一見出し語としている。
  - 2-3. 助数詞部分の読み方が、たとえば「ひき」「ぴき」「びき」のように異なる場合は、横に並べて同一見出し語としている。
  - 2-4. 「かぞえましょう」は、「かぞえ」と「ましょう」を見出し語にし、「かぞえ」については横に終止形を示した。
3. 数詞部分、助数詞部分の読み方が異なる見出し語については、(1)(2)……のように下位分類した。
4. この映画における助数詞を伴った数詞は、文単位で用いられていないが、この基礎篇の他の課における文と同様の扱いにし、①②……の数字をつけた。これはシナリオに現れる通し番号で、この解説書全体に共通のものである。同一見出し語内ではこの順に文例（語例）を提出した。(1)(2)……と下位分類した場合も、その分類内で同一の提出順をとっている。全くの同一文（同一語）の場合には、⑦⑩のように数字を横に並べ、引用を一回ですませた。
5. 見出し語の横には〔 〕で当用漢字の範囲内で漢字を示し、また、その横には（ ）で語の使用回数を示した。

6. 文例（語例）の使用環境を知りたい場合には、資料 2. のシナリオ全文を参照のこと。

いち、いっ〔一〕(8)

(1)⑤ いちびょうまえ

⑦⑫ いちまい

(2)⑳㉒ いっぴき

㉓㉕ いっほん

⑥⑩ いっばい

いつつ〔五つ〕(2)

④⑥ ひとつ

かぞえ、かぞえる〔数える〕(2)

⑪⑫ さあ、かぞえましょう。

ご〔五〕(5)

① ごびょうまえ

⑬ ごまい

⑲ ごひき

㉑ ごほん

⑥⑦ ごにん

ここのつ〔九つ〕(1)

④⑧ ここのつ

さあ(2)

⑪⑫ さあ、かぞえましょう。

さん〔三〕(9)

③ さんびょうまえ

⑨⑭ さんまい

⑲⑳ さんびき

㉑㉒ さんほん

⑥⑩ さんばい

⑥⑩ さん にん

スタート(1)

⑥ はい、スタート。

とお〔十〕(1)

④⑨ とお

ななつ〔七つ〕(1)

④⑥ ななつ

に〔二〕(8)

④ にびょうまえ

⑧⑬ にまい

②②⑤ にひき

③③⑥ にほん

⑥① にはい

にん〔人〕(3)

⑥⑤ さんにん

⑥⑥ よにん

⑥⑦ ごにん

はい(1)

⑥ はい、スタート。

はい、ばい、ばい〔杯〕(6)

(1)⑤⑥ はい

⑥① にはい

(2)⑤⑦ ばい

⑥⑩ いっばい

(3)⑤⑧ ばい

⑥② さんばい

ひき、びき、びき〔匹〕(11)

(1)①⑧ ひき

②②⑤ にひき

②⑦ よんひき

- ㊸ ごひき  
 (2)19 びき  
     ㊸24 いっびき  
 (3)20 びき  
     ㊸26 さんびき  
 ひとつ〔一つ〕(2)  
     ㊸40 ひとつ  
 ひとり〔一人〕(1)  
     ㊸68 ひとり  
 びょう〔秒〕(5)  
     ① ごびょうまえ  
     ② よんびょうまえ  
     ③ さんびょうまえ  
     ④ にびょうまえ  
     ⑤ いちびょうまえ  
 ふたつ〔二つ〕(2)  
     ㊸41 ふたつ  
 ふたり〔二人〕(1)  
     ㊸64 ふたり  
 ほん, ぼん, ほん〔本〕(11)  
 (1)29 ほん  
     ㊸33 ほん  
     ㊸38 よんほん  
     ㊸39 ごほん  
 (2)30 ほん  
     ㊸32 ほん  
 (3)31 ほん  
     ㊸34 ほん

まい〔枚〕(10)

⑦⑫ いちまい

⑧⑬ にまい

⑨⑭ さんまい

⑩⑮ よんまい

⑪ まい

⑯ ごまい

まえ〔前〕(5)

① ごびょうまえ

② よんびょうまえ

③ さんびょうまえ

④ にびょうまえ

⑤ いちびょうまえ

ましょう(2)

⑰⑳ さあ、かぞえましょう。

みっつ〔三つ〕(3)

④⑤⑥ みっつ

むっつ〔六つ〕(1)

④⑤ むっつ

やっつ〔八つ〕(1)

④⑤ やっつ

よ、よん〔四〕(6)

(1)⑥ よにん

(2)② よんびょうまえ

⑩⑮ よんまい

⑳ よんひき

㉔ よんほん

よっつ〔四つ〕(2)

④⑤ よっつ



## 資料2. シナリオ全文

題 名 日本語教育映画  
「さあ、かぞえましょう」  
——助数詞——

企 画 国立国語研究所  
制 作 日本シネセル株式会社  
フィルム 16m/mEKカラー・スタンダード  
巻 数 全1巻  
上映時間 5分  
現 像 所 東洋現像所  
録 音 アオイスタジオ  
完 成 昭和51年3月31日

### 制作スタッフ

制 作 静 永 純 一  
制作担当 神 崎 晴 之  
脚 本 前 田 直 明  
演 出 前 田 直 明  
演出助手 辛 島 徹 夫  
撮 影 相 良 国 康  
撮影助手 市 川 哲  
照 明 伴 野 功  
音 楽 吉 田 征 雄  
録 音 堀 内 戦 治 (アオイST)  
ネガ編集 亀 井 正  
配 役 手品師 松 尾 昭  
(ナレーター 関 根 信 昭)

	画 面	セ リ フ
1	メイン・タイトル 日本語教育映画	
2	ストップウォッチ 5秒前から1秒前まで	①ごびょうまえ ②よんびょうまえ ③さんびょうまえ ④にびょうまえ ⑤いちびょうまえ ⑥はい、スタート。
3	手品師、紙片をとり出す テーマ・タイトル さあ、かぞえましょう 紙片を数える  数えた紙片をまとめて、手で にぎると粘土 それを机の上に置き、手で押 す 平らな粘土 (スーパー“まい”) 手品師、粘土をなでると一枚 のカード 実写 レコード 2枚 皿 3枚 ワイシャツ 4枚 切手 5枚 手品師、いろいろな色のハン カチを次々に取り出す	⑦いちまい ⑧にまい ⑨さんまい ⑩よんまい    ⑪まい ⑫いちまい ⑬にまい ⑭さんまい ⑮よんまい ⑯ごまい  ⑰さあ、かぞえましょう。
4	手品師、ポケットから粘土で できた動物を取り出す (スーパー“ひき、ぴき、び き”)	⑱ひき ⑲ぴき

それをシルクハットの中に入れる

そして取り出すと、ハムスターが出てくる

実写 あなぐま 1匹  
いぬ 2匹  
さる 3匹  
かめ 4匹  
かに 5匹

5 手品師、粘土を取り出し、棒状にする

(スーパー “ほん、ぼん、ぼん”)

気合をかけると、粘土は一本の棒となる

棒に布をかけ、そのなかからピンを取り出す

実写 かさ 1本  
木 2本  
バンド 3本  
鉛筆 4本  
ネクタイ 5本

手品師、指の間からたばこを取り出す

最後のたばこを口にくわえ火をつける

6 手品師、粘土を取り出し、まるめて机の上に置く

②0びき

②1いっぴき

②2にひき

②3さんびき

②4いっぴき

②5にひき

②6さんびき

②7よんひき

②8ごひき

②9ほん

③0ぼん

③1ぼん

③2いっぽん

③3にほん

③4さんぼん

③5いっぽん

③6にほん

③7さんぼん

③8よんぼん

③9ごぼん

(スーパー “ひとつ”)

手品師、つぎつぎに粘土をま  
るめて置く

ハンカチをかけるとふうせん  
が出てくる

実写 ボール ひとつ  
卵 ふたつ  
カップ みつつ  
みかん よつつ  
あめ ひとつ

7

ティーカップ ひとつ  
(スーパー “はい、はい、ば  
い”)

ティーカップ みつつ  
手品師、ティーカップに紅茶  
をそそぐ

8

手品師、細長い布袋より子供  
をとりだす  
(スーパー “ひとり”)  
次々と子供たちが出てくる

④0ひとつ

④1ふたつ

④2みつつ

④3よつつ

④4ひとつ

④5むつつ

④6ななつ

④7やつつ

④8ここのつ

④9とお

⑤0さあ、かぞえましょう。

⑤1ひとつ

⑤2ふたつ

⑤3みつつ

⑤4よつつ

⑤5ひとつ

⑤6はい

⑤7はい

⑤8はい

⑤9みつつ

⑥0いっぱい

⑥1にはい

⑥2さんばい

⑥3ひとり

⑥4ふたり

⑥5さんにな

⑥6よにな

手品師とふうせん  
子供たちにひとつずつ渡す  
手品師，子供たちと手を振り  
あいながら離れていく  
子供の出てきた袋に入り，消  
える

9

企画・制作タイトル

企画 国立国語研究所

制作 日本シネセル株式会  
社

昭和54年3月

## 国立国語研究所

〒115 東京都北区西が丘3-9-14  
電話東京(900)3111(代表)

印刷所 神谷印刷株式会社  
電話(912)2571